

[ 特集 ]

# 地域に開かれた大学へ

～女子大学の地域貢献活動～

東日本大震災以降、地域との結びつきの必要性が見直されています。  
跡見学園女子大学でも、地元である文京区、新座市との  
地域連携活動を積極的に行うほか、  
学生が中心となって、さまざまな地域の伝統や文化を支援する取り組みも行っています。

観光支援で  
地域活性化の  
お手伝い



文京区・  
新座市との  
結びつきを  
強める



観光  
PRによる  
震災復興  
支援



地域に  
根付く文化の  
見直し



## 災害時の妊産婦・乳児受け入れ

# 女子大学の地域連携活動

跡見学園女子大学では、大学キャンパスがある文京区、新座市との地域連携・貢献活動を積極的に行うほか、会津若松市の観光支援活動も実施。学生たちを中心に、さまざまな交流も始まっています。

東日本大震災を受け、文京区との間に「災害時における妊産婦・乳児支援に関する相互協力」の協定を結びました。災害発生時には大学の文京2号館3階フロア全域を開放し、妊産婦・乳児の受け入れ、医師や助産師がいる相談室の設置や粉ミルクの備蓄も計画しています。

災害発生時には、女子大として外部受け入れにも慎重を期さねばなりません。「学生の安全・安心」を第一に確保しながら地域に協力できることはないかと考え、本件締結に積極的に取り組みました。このような取り組みを大学と地域が合同で行うことは、全国でも初めてのことで、地域との連携を一層強くすることに加え、緊急時に他者のために行動できる、思いやりのある女性を育成したいという思いも込められています。

お話：内山康和大学事務局長



締結を交わした成澤廣修文京区長(右)と山田徹雄学長(左)。



災害発生時に開放される文京キャンパス2号館、3階教室(可動機)の様子。



## 「学生が主役」の地域貢献を推進

跡見学園女子大学では、地域連携・地域貢献活動をスタートする際に、「学生が地域の中で生き生きと動くことができるか」ということを強く意識しました。というのも、学生が自らの意志で企画し、積極的に地域に溶け込んでこそ、学生にとっても地域にとっても得るものが多いと考えたからです。大学が正式な協定を結んだケースであっても、学生が主役となつて活動できる取り組みであるかどうかを第一に考えています。

本学ではまず、2008年に埼玉県新座市と、続いてキャンパス増設に伴って2011年度に東京都文京区と包括協定を締結。さらに、かねてからマネジメント学部とのゼミを通して交流のあった福島県会津若松市と2012年に、パートナーシップ協定を結びました。

文京区とは一昨年の震災を機に、災害時に本学を乳幼児・妊産婦母子救護所として開放する支援協定を締結しています。これは、女子を預かる学校として本学ができることは何かを考え、中高生や学生の安全と安心を確保するとともに、弱者を救済するという本学の考えと、文



跡見学園女子大学副学長大塚博教授



## 朗読コンテストを開催

文京区にゆかりのある文豪・森鷗外の生誕150年を迎えた2012年。文京区では、さまざまな記念行事が企画されました。そのひとつである「朗読コンテスト」への協力依頼が森鷗外研究の第一人者である山崎一穎理事長を通じてあり、文学部コミュニケーション文化学科には、朗読に精通したアナウンサー出身の先生方が在職していることから、区と共催することとなりました。

一般から参加者を募ったコンテストを行うのは初めての試みでしたが、全国か

ら143人もの応募があり、反響は予想以上。NHK放送研修センター日本語センターによる厳正な審査で選ばれた15名が、10月13日の本選で熱のこもった朗読を披露しました。250人を超える観覧者からは、「想像力をかきたてる朗読の世界を堪能できた」などの感想も多く、今後も朗読の楽しさを伝える機会として続けていきたいと考えています。なお審査には、鷗外の曾孫である森美奈子さんに特別審査委員として加わっていただきました。

お話：小仲信孝文学部長



審査の間などに見学できるよう、森鷗外にまつわる資料を企画展示。

## 会津若松市の観光支援

会津若松市は、マネジメント学部観光マネジメント学科が毎年インターンシップを行っている、縁の深い場所です。東日本大震災による風評被害を受けた同市の現状を“観光”を足がかりに変えていこうと、2012年7月25日に、大学と会津若松市の間でパートナーシップ協定を締結しました。

主な活動としては、旅行会社と提携し、地元で活躍する女性たちにスポットを当てた「人物観光」のツアー提案。また、景観の復興に向けて、桜の木を贈るなど、多角的に市の活性化をサポートしています。

お話：内山康和大学事務局長



「人物観光」の取材の様子。活動は、全国紙でも取り上げられました。



跡見学園の校章でもある桜の木を植樹。室井照平会津若松市長より、感謝状をいただきました。

京区の考えが一致したことによるものです。また、会津若松市では東日本大震災と福島第一原発事故が引き起こした風評被害によって観光客が激減した同地区の復興に向けて、学生たちが地元の女性たちに会い、話を聞く「人物観光」という独自のプログラムを企画しています。名所旧跡や有名スポットめぐりなどの観光開発が多いなか、そこで実際に生活している女性に焦点を当てたという、まさに女子学生だからこそできた企画といえるでしょう。

3地域以外でも、各学部のゼミ単位で地域と連携した多彩な取り組みが進んでいます。実際に地域に入り込み、その場の人々の意見や要望を聞きながら活動することで、新聞やインターネットなどでは知ることのできなかった実態や問題点などを知る貴重な体験を積んだようです。活動を通じて、相手の立場に立って話を聞けるようになった、さまざまな活動でリーダーシップを発揮できるようになった、との感想も聞かれ、人間的にも大きく成長しています。彼女たちの活動がほかの学生に刺激を与え、多くの学生が地域連携・地域貢献に関心を持つようになることも期待しています。そして、今後もさらにさまざまな地域との連携を推し進めていくことが、大学の教育目標である「自律し、自立した女性」をつくることにつながると思っています。

# 私たちの地域貢献・支援活動

学科単位、ゼミ単位でも学生を中心として、たくさんの方の地域貢献・支援活動が行われています。学外での社会活動は、学生たちにとっても授業では体験できないよい機会となっているようです。

## 新座市内の防犯活動

2011年8月に跡見学園女子大学、新座市役所、新座警察署の間で「新座市における女子学生安全対策協定」を締結し、女性を犯罪から守る防犯活動をスタートしました。

大学では、新座キャンパスの学生を中心に、「防犯リーダー」を設置。週に一度の定例会議で、新座市の性犯罪について情報を集め、女性を性犯罪から守るための対策を練っています。

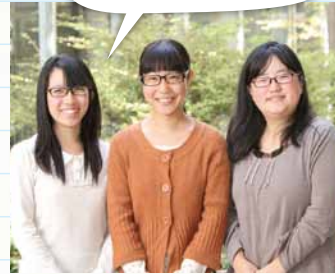
2012年10月には新座駅前で女子大学生を対象に防犯チラシを配付し、防犯意識の向上を図りました。また、11月には新座キャンパスに警察官を招き、危険な事態に遭ったときに、自分の身を守るための護身術を学びました。

今後は、新座市内の性犯罪発生率を基にした防犯マップの作成や電車内での痴漢対応策、女性の一人暮らしにおける注意喚起など、女子学生ならではの視点を活かした防犯対策の実施に力を入れていく予定です。



駅前でチラシなどを配布。

女性を狙った犯罪は予想以上に多発しています。みなさんには、日頃から防犯意識を持って生活してほしいと思います。



(右) 文学部  
現代文化表現学科2年  
杉本 愛さん  
(中) 文学部  
臨床心理学科2年  
堀田 華加さん  
(左) マネジメント学部  
生活環境マネジメント学科  
2年  
天野 真奈美さん

## カウンセリングによる不登校児童・生徒との交流

臨床心理学科の学生を新座市内の小中学校に派遣し、子供たちの心のケアや学習支援に取り組む「ピア・サポーター制度」。2007年から始まった同制度では、今までに新座市・朝霞市など30校以上の学校にピア・サポーターを派遣し、不登校児童・生徒の未然防止や早期発見、授業復帰支援などの活動を行っています。

学生たちは、学校を休みがちであったり保健室登校をしたりしている子供の声に耳を傾け、メンタル面をサポート。教師よりも年齢が近い学生は、児童生徒にとって「お姉さん」のような存在で、素直に悩みを相談しやすいようです。時には授業に付き添い、授業参加を促す役割を務めることもあります。この活動は学生にとっても、3年次の必修科目「カウンセリング実習」での実践につながる経験になっています。

悩みを抱えている子供はみんな素直で純粋。学校で勉強したり友達と一緒に遊ぶ手助けになりたいと思っています。



(右) 文学部  
臨床心理学科3年  
悉知 弥生さん  
(左) 文学部  
臨床心理学科3年  
泉 眞愛さん



ピア・サポーターの名札。



# 人車でつなぐまちづくり 〜小田原の観光支援〜

2012年9月19日に開催された

「大学生観光まちづくりコンテスト2012」。観光庁、文部科学省、旅行会社などから審査員を迎え、学生が自由な発想で考えたまちづくりプランを発表し、優秀なプランは商品化やプロジェクト化も検討されるこのコンテストに、マネジメント学部観光マネジメント学科の村上雅巳准教授のゼミから複数のチームが参加し、「team MASAMI」が優秀賞（第2位）を受賞しました。

チームはゼミが始まる4月に結成され、小田原を対象地域に決定。どのようにして小田原の知名度を上げるかが



優秀賞の賞状とともに



再現された人車。



課題となりました。そのヒントとなったのが、同学科の小川功教授の授業で得た知識と現地取材。そこで、かつて存在した人力で客車や貨車を押す「ずら豆相人車鉄道」に観光資源としての価値を見いだしました。地元市民の間でも認知度の低い「人車」を取り上げ、市民の意識も刺激して共に観光を盛り上げるまちづくりプランを作成。発表時には人車を押す車丁の様子を再現するなど、わかりやすさを意識しました。10分間の発表に人車の魅力を詰め込み、埋もれていた観光資源にスポットライトを当てた点が評価されました。

まだまだ埋もれている観光資源がたくさんあるはず。地域の魅力を最大限に活かす観光づくりをしていきたいです。

コンテストの発表は、人車を押す車丁の格好で。



(右) マネジメント学部 観光マネジメント学科3年 野尻 あゆみさん  
(中) マネジメント学部 観光マネジメント学科3年 板橋 明日香さん  
(左) マネジメント学部 観光マネジメント学科3年 喜柳 麻衣さん

team MASAMIのメンバー。(左から) 松下茜さん、喜柳麻衣さん、坂井真澄さん、野尻あゆみさん、板橋明日香さん



## 「ぶんぱく」への参加

11月16日・17日に開催された文京博覧会「ぶんぱく2012」に今年も参加。学生がブースに立ち、文京区のPRや東北の観光について紹介したほか、新潟産のお米やお酒、香辛料のふきんとう\*味噌や南蛮味噌などの販売も行いました。

※「ふきのとう」のこと。信州の田舎での呼び方。



(写真上) 名産品を学生たちが紹介しながら販売。  
(写真左) ブースでは、文京区の循環バス「B-ぐるバス」で使われている文京区のPR映像を放映。映像は、学生たちが作ったもの。



## べったら漬で 江戸文化をアピール

江戸時代から愛され続けている東京べったら漬。マネジメント学部マネジメント学科の芝原脩次教授のゼミでは、一昨年から株式会社東京にいたか屋と、若い世代に向けたべったら漬のPR活動に取り組んでいます。

「べったらプロジェクト」としてスタートした活動では、べったら漬発祥の地とされている日本橋にある小学校で、べったら漬の成り立ちを紙芝居でわかりやすく紹介したほか、べったら漬のオリジナルレシピも考案。洋食にぴったりのタルタルソース「べつタルタル」など、若い女性向けのレシピ作りにも力を入れています。また、セロリを使ったべったら漬の「セロったら」は、新聞やテレビでもたびたび取り上げられ、知名度を上げています。

さらに、10月19日、20日に中央区の宝田恵比寿神社とその周辺で開催された伝統行事「べったら市」に参加。プロジェクトメンバーを中心にゼミ生が協力し、オリジナルレシピの試食会やスタンプリアー、べったら漬の歴史を紹介するパネル展示を行いました。

プロジェクトは好評に終わり、来年もべったら漬を通して地域のさらなる活性化を目指していきます。



(写真上) べったら市での跡見ブース。(写真下) 日本橋小学校で行ったPR活動の様子。



伝統的な東京の食文化であるべったら漬を若い人たちの間にも浸透させ、地域の活性化に繋がることが目標です！



(左から)  
マネジメント学部  
マネジメント学科3年  
荻野 聡美さん  
マネジメント学部  
マネジメント学科3年  
山口 紗耶香さん  
マネジメント学部  
マネジメント学科4年  
高橋 美加さん  
マネジメント学部  
マネジメント学科4年  
吉田 佳奈英さん

## 食による地域活性化を体験

マネジメント学部生活環境マネジメント学科の石渡尚子教授のゼミでは、西川口で開催される「川口B級グルメフェスティバル」に2010年から参加しています。このイベントは、川口市のグルメを広く紹介することで商店街の活性化を図ることを目的としており、グルメマップを作成して地域に配布したこともあります。

今年は出店だけでなく、運営にも参加。4年生を中心にステージMCや、震災遺児への寄付金を集める「就学支援ビンゴ大会」なども企画しました。また、さらなる来場者の増加を目指して、川口市だけでなく埼玉県内の有名

店にも学生が直接出向いて出店を依頼。鴻巣市の名物である川幅うどんの「大むら」や「飲むチーズケーキ」が人気のさいたま市にある「手作りチーズケーキの店ダンテ」などが出店し、長い行列を作りました。

3年生は先輩のレシピを改良し、カボチャとサツマイモを使った「ATOMI団子」を800食販売。材料の仕入れや経費の管理も含め、商品の製造から販売まで一連の流れを体験し、食のリスクマネジメントを実践的に学ぶことができました。



(左) マネジメント学部  
生活環境マネジメント学科4年  
高橋 佳歩さん  
(右) マネジメント学部  
生活環境マネジメント学科4年  
五十嵐 麻里さん

西川口の商店街の人たちとも連絡を取り合う機会が多く、学校以外の社会でどう人と接すればいいのかということも勉強になりました。



用意した「ATOMI 団子」はすべて完売。



## 谷中の魅力を 街歩きで発見

東京の「山の手」といわれる一角にありながら、下町情緒を残す谷中を、女子大生の視点で案内するという『谷中まちあるきツアー』。東京商工会議所とJTBとの共同企画に、マネジメント学部芝原脩次教授と篠原靖准教授のゼミの学生が合同で参加しました。

歴史深いお寺や地域に根ざした商店街のある谷中は、女子大生には馴染みの薄い街。何度も下見に訪れ、実際に活動している谷中ボランティアガイドの案内を見聞きしたり、商店街の人たちに話を聞いたりして、「自分たちらしい」街案内の方法を考えました。また、初めての本格的なフィールドワークを体験した篠原ゼミの学生は、社会活動の経験を持つ芝原ゼミの学生から多くのことを学び取ることができました。

『谷中まちあるきツアー』の当日は、40〜70代を中心に30人の参加者を迎えました。学生たちは事前に調べた街やお寺などの歴史について、時には写真や絵を見せつつ紹介。途中で30分の休憩を入れた5時間15分の街案内を3エリアに分担して行いました。

最後に集合写真を添えた手紙を参加者に渡したところ、心のこもった記念品としてとても喜ばれました。



(写真上) まちあるきの最後に渡した記念写真と手紙。(写真右) 女子大学の旗を持って、谷中を案内しました。



「顧客満足」ではなく「顧客感動」を目指し、取り組んだツアー。参加者から喜んでもらうことで私たちも感動をもらいました。



マネジメント学部  
観光マネジメント学科3年  
松澤 和さん

## 女子大生の視点で 奥四万十の 観光を見直す

四万十川が流れ、緑豊かな山に囲まれた高知県の奥四万十地域。高齢化が進むこの場所を観光で活性化させたいと始まったのが、「奥四万十自然体験村構想プロジェクト」です。マネジメント学部観光マネジメント学科の篠原靖准教授が先頭となって進めていたプロジェクトに、観光マネジメント学科の学生4人が参加しました。

夏には3泊4日で現地を訪れましたが、街灯はない、コンビニもない、目立った観光地もない奥四万十にどう人呼び込めばいいのか、学生たちは当初不安になったそうです。

しかし、地域の人たちとの意見交流会や、久木ノ森風景林の散策などで気がついたのは、やはり自然の美しさと人の温かさ。「街灯はないけれど数えきれないほどの星が見える」「ホテルの住む清流をつくる森がある」「自給自足の生活を体験できる民宿がある」という奥四万十の良さに注目した観光プランを、地元の人たちに発表しました。地元の方からは「住んでいる者では気付けない、女性らしい視点で意見をもらえた」と高く評価していただきました。



(写真上) 自然豊かな久木ノ森風景林を散策。(写真左) 奥四万十地域の人たちは、穏やかで温かい人ばかり。

地域に基づいた観光を見直すよいきっかけになりました。経済活性化の原動力になる観光に、これからも携わってまいります。



マネジメント学部  
観光マネジメント学科3年  
藤川 愛未さん